

伝えたいこと、伝わらない理由、伝え方

CNCP 個人正会員
小林 大



私事であるが、雪の降り積もった冬山を登りスキーで滑り降りるのが好きである。滑るところは単なる冬山、当然自分の足で登る。スキーの裏にはシールとかスキンとか言う毛皮状の帯を貼り付け滑り止めにして歩く。山用のバインディングは歩く時に踵がパカパカと上がるようにできていて歩き易い。

山では降った雪が積もりっ放し、そこをスキーで歩くと雪が踏み固められトレースと言う溝ができる。後から来た人はトレースを歩けば既に雪が踏み固められており歩き易い。

山では時として腰まで埋まる雪の深さ、そんな時、昔々まだスキーが細かった時代はスキー諸共埋まってしまう先頭に行く人はホントに大変だった。だから、後から来る人は先頭に行く人をリスペクトし、更に後から来る人のことを思いトレースを崩さないように大事に歩いていた。なぜならトレースは雪山にアクセスする重要なインフラだからだ。

最近そんな山スキーの道具が急激に進化、びっくりするぐらいスキーが太くなるなど深い雪でもいとも簡単に歩けるようになった。そんなこともあり山スキーに来る人達が爆増したが大半の人は進化した道具しか知らない、トレースは無造作に歩かれすぐにボロボロになるようになった。ただ、進化した道具はトレースが多少ボロボロになっても歩き易いし、いよいよズタボロになったら別のところに簡単に付け替えられる、そう、トレースは大事に使うインフラから使い捨てインフラになったのだ。

さて、そんな冬山、山スキーの道具の進化と変化したトレースの位置付けを思いつつ、私の専門である社会インフラのメンテナンスに思いを馳せてみる。

我々土木技術者は、社会インフラの維持管理に対する予算、あるいは投資が少ないと嘆いているが、そのような思いは市民になかなか届かない。生まれた時からあり今でも問題なく使っている社会インフラに何の問題があろう、市民は社会インフラの老朽化など感じられない、そもそも理解のしようがないのだ。家の近所の橋が突然壊れ通行止めになった、出掛ける時にネットで今日通れそうな道を確認する、そんな世の中にならないと市民は社会インフラの老朽化に気が付かないだろう。でも、我々土木技術者はそれをよしとしないし阻止しなくてはならない。

こんなことを考えていると、ふと、技術開発・技術革新という言葉が思い浮かびモヤモヤ感がちょっと晴れた感じがした。我々土木技術者はアグレッシブに技術開発・技術革新に臨みそれをもって市民に思いをぶつける、技術開発・技術革新と市民への訴えかけは表裏一体ではないのかと。市民への訴えかけと言った観点で技術開発・技術革新を俯瞰するとどうだろう？自分の職務に照らししばし考え込んでしまった。

